

【第7回】

日本生理学会 100周年に向けて —日本医学会との関わりから—

東邦大学医学部生理学講座統合生理学分野
赤羽 悟美

日本医学会は1902年に開催された第1回日本聯合医学会をもって創設され、創立120周年を迎えました。日本の医学がドイツを中心とした西洋医学を吸収し成長しつづつある時代でした。第3回から日本医学会と改称され、以後、終戦直後の混乱期のために1年延期された第12回日本医学会を除いて、4年毎に開催されてきました。第12回日本医学会において、「医学および近接科学の進歩発達を図り、分科会間の連絡を密にするとともに、わが国の内外に対する日本医学界の代表機関とする」ことを目的として常設化することを決定し、日本医学会が常設化されました。

第1回日本聯合医学会は、1902年4月に東京で田口和美会頭、北里柴三郎副会頭の下で開催され、1700余名が参加し、16分科会において活発な研究発表が行われました。現在の日本医学会の「分科会」はそれぞれ個別の加盟学会に対応していますが、日本聯合医学会の分科会には、日本解剖学会、日本神経学会など既に設立されていた9学会に加えて、まだ正式に学会として発足していない基礎医学・臨床医学の多くの領域を含んでおり、第2分科会は生理学と医化学で構成されていました。第3回日本医学会（1910年）において、大澤謙二（東京大学医学部）が「生理学の進歩」という特別講演を行っています。

欧米においても、反射機構の研究（Sherrington（1906, 1920～1930年代））、自律神経系の研究（Dale（1914）、Loewi（1921）、Langley（1921））およびCannon（1929）等をはじめ、画期的な生理学研究が行われていました。

留学から帰国した先人たちが医学部に生理学講座を創設し、我が国において生理学研究が産声を上げ成長しつづつあったことが、日本医学会の回数を追うごとに生理学領域の研究発表の演題数が増えていったことから窺われます。さらに、留学を経ずに日本から独自の生理学研究の世界的に大きなインパクトを与える成果が上がりはじまりました。加藤元一は「不減衰伝導学説」（1923年）を提唱し、神経生理学の重要な概念を拓きました。第7回日本医学会（1926年）において特別講演を行っています。

1918年以降、多くの生理学講座が設置され、生理

学専門の学会を結成しようという機運が高まりました。そして1922（大正11）年4月に開催された第6回大会において、生理学独自の学会を開催することが決定されました。1922（大正11）年7月、東京大学にて第1回日本生理学会が開催され、日本生理学会が創立しました。日本生理学会の歴史については、日本医学会120年記念誌に詳しく紹介されていますので、是非、お読み頂ければと存じます。

その後、日本医学会の法人化が計画されていた折、日本医師会が2013年4月に公益社団法人として認められたため、登記上の名称を変更することとなり、一般社団法人日本医学会連合が設立されました。日本生理学会は、日本医学会・日本医学会連合の基礎部会において、日本医学史学会、日本解剖学会に次いで3番目に歴史のある所属分科会であります。日本医学会の理事として、生理学の多くの先生方が運営に貢献して来られました。また、日本医学会連合の他学会連携フォーラムやTEAMS事業を通じて、他学会との領域横断的な学術活動の連携・交流を行っています。

日本医学会が創設120年を記念して作成した「未来への提言」の中で、医学研究者の育成が非常に重要であるとともに、医学・生命科学研究者と社会との対話と革新的発見や技術開発の研究力を堅持していくことは非常に重要であり、「一見何の役に立つかわからない」基礎的研究の成果が革新的な医療技術開発の基盤を拓くことがあるということを広く社会で共有し、基礎研究支援に対する社会の理解をさらに深めていくことが望まれるとされています。

「生命の理」を解く学問領域としての生理学が、過去から未来に向かって一貫して追求している中心的課題として「生命の恒常性」が挙げられます。生命科学や基礎医学が細分化されて精密な理解が進むとともに、臓器や細胞の連携による恒常性維持機構の統合的な理解が進みつつあり、生理学研究の領域と生理学研究者が担う役割は広がりつつあるのではないのでしょうか？次の100年に向かって、医学・生命科学の進化とともに生理学も進化し、それを担う研究者と教育者を育成する役割を日本生理学会は担い続けていくものと展望しております。